

交感としての「うつし」

——— 橋本雅也 × 六田知弘

本展は、彫刻家・橋本雅也と写真家・六田知弘による二人展であり、「うつし」という行為を通して、世界と人間の関係そのものを再考する試みである。ここで言う「うつし」とは、対象の形態を一方的的に写し取る模写的行為ではない。それは、主体と客体、見る者と見られるものという近代的な二項対立を揺るがし、意識(私)の外部に広がる世界との相互的な関係生成として理解されるべき概念である。

橋本雅也の彫刻実践は、自然物に手を加えることで、それらが内包してきたものが表出する現象への関心から始まっている。独学で制作を開始した橋本は、木、動物の角や骨、鉱物、土といった多様な素材を扱いながら、常に素材やモチーフの表層ではなく、その奥行に潜む構造や時間性へと視線を向けてきた。彼の彫刻において、素材は加工される受動的な対象ではない。むしろ作家の介入を通して、自らの潜在性を顕在化させる能動的な存在として立ち現れる。

橋本の基調を成す、鹿の角や骨を素材とし、身近にある草花をモチーフとした作品群においては、生と死、自然と人為、象徴と実体といった対立項が静かに交錯し、彫刻は固定された形態ではなく、生成と変容のプロセスとして提示される。形を「与える」のではなく、すでにそこに在ったものを引き出すという姿勢は、世界との関係性そのものを問い返す行為でもある。

一方、六田知弘の写真実践は、1980年代初頭、ネパール・ヒマラヤ山中のシェルパの村に身を置き、自然とともに生きる人々の生活を撮影することから始まった。その経験は、六田の制作に一貫して流れる「自然や宇宙との根源的なつながり」への志向を決定づけている。六田の写真は、対象を記録・再現するためのものではなく、光、時間、気配が交錯する「場」を定着させるための装置として機能する。「地」「水」「火」「風」といったシリーズにおいて、被写体は常に具体的でありながら、写真は個性を超え、世界そのものが立ち上がる瞬間へと開かれている。

また六田は、「祈り」と「時」を重要な主題として、日本美術の仏像、ヨーロッパのロマネスク美術、中国の雲岡石窟、ポロブドゥールなど、宗教的・文化的遺産の撮影にも長年取り組んできた。そこでは、信仰の対象は美的鑑賞へと回収されることなく、長い時間の堆積と人間の祈りが交錯する場として捉え直されている。写真は、見る者を世界の外部に置くのではなく、世界の内部へと引き戻す媒介として作用している。

ここであらためて「うつし」という概念を抽象化して捉えるならば、それは表象以前の世界との接触の形式であると言えるだろう。「うつし」は、主体が世界を認識し、意味づける以前に起こる、感覚と物質、時間と身体の詳細な干渉の総体である。そこでは、見ることは視覚に限定されず、触覚、聴覚、重力感覚、時間感覚までも含み込んだ全身的な経験として立ち上がる。

橋本と六田の実践が示しているのは、作品とは完結した意味を伝達する媒体ではなく、世界との関係が一時的に結晶化する場であるという認識である。写真や彫刻は、自然や物質を「表す」ものではなく、自然や物質がこちらに働きかけてくる出来事を受け止めるための器として存在している。その意味で「うつし」とは、制作の方法であると同時に、世界に向き合う態度そのものでもある。

この態度は、人間を世界の中心に据える視点を静かに後退させ、むしろ人間もまた、森羅万象の連なりのなかで「うつされ続ける存在」であることを示唆する。橋本と六田の作品が放つ静けさは、自然への回帰や精神性の称揚ではなく、世界とともに在ることの困難さと豊かさを、私たちの知覚の深層において問い返すものなのである。

両者に共通しているのは、世界を理解し、把握し、支配する主体としての人間像を退け、むしろ世界との接触によって変容させられる主体を引き受けている点である。目に入る木の葉は私をうつし、同時に私はその木の葉にうつされている。この相互浸透的な関係性こそが、「うつし」という概念の核心にある。

写真と彫刻という異なる表現領域にありながら、橋本雅也と六田知弘の実践は、視覚中心主義や人間中心主義を静かに解体し、世界とともに在るための感受性を回復させる。本展は、作品を「見る」場であると同時に、見ることそのものが問い返される、知覚と思考のための実験場なのである。